「中三で気づいた人間という恐怖」

原野谷中学校　三年　戸塚　にこ

私は小学四年生のときにバレエで広島、長崎の原爆の悲惨さを伝えるため舞台で劇を披露した。その劇をするにあたり、バレエの先生に戦争の恐ろしさについて教えてもらった。

もっと戦争について知りたいと思い広島へ行き原爆ドーム、平和記念公園を見た。今ではっきりと覚えている。小四の私からしたら戦争は衝撃的なもので、足の震えが止まらなかった。本当にこの世界で昔、戦争が起きていたとは思えなくて、思いたくもなかった。その後、戦争を経験したひいおじいちゃんにも話を聞いた。ひいおじいちゃんは私に、「僕は戦闘機の第一号に乗って戦場に行く予定だった。戦闘機は第四号から順に出発した。第一号の僕たちもやっと、行く準備ができ、行こうとしたとき、天皇の放送が流れ終戦した…。みんなのもとに帰っても、なんで国のために戦わなかったんだ！なぜ国のために死

20 × 20

ななかったんだ！と言ってくる人もいた。」

と、そう教えてくれた。

「なぜ国のために死ななかったんだ！」その言葉を聞いたとき、ゾッと震えがした。もし、ひいおじいちゃんが戦場に行っていたら、国のために亡くなっていたら、今の私はない。そう思うと、命がどれだけ大切で、尊いものなのか改めて感じた。戦争の悲惨さを知った私は劇に対する気持ちも変わった。私は主人公の妹役で最後は血の川に流される役だった。

こんな幼い子が、ただ普通に生活していただけなのに、姉と離れ離れになり亡くなっていくなんて、考えただけでも涙が止まらなかった。今こうして私たちが生活できている「あたりまえ」。その「あたりまえ」はあたりまえ」じゃないと、こんな幸せなことはないと、小四の私は気づいた。

そして、現在中学校で改めて戦争について学び小四とは違う衝撃を受けた。小学校の私はただ戦争は怖いものとしか見ていなかった。

20 × 20

しかし、中学で学んで思ったことは、戦争の怖さはもちろんだが、人間の恐ろしさだ。戦争中、人々は洗脳されてしまっていると思う。

「国のために」などと自分に言い聞かせ、敵の人を殺す。人を殺したらほめられる、そして喜ぶ。そんな考えを持ってしまった人間が怖い。そして実際に今ウクライナとロシアでそれが起こってしまっている。第二次世界大戦後、あれほど「平和でいよう」と願い、誓ったのに、人間はまた同じことを繰り返して しまう。戦争は人間を壊す一番の悪者だ。

私に戦争のことを教えてくれたひいおじいやんはもうこの世にはいない。どんどん、戦争を経験した人が減ってしまい、戦争の記憶がなくなってしまう。だから私はこれからも舞台や作文など、いろんなことを通して戦争を次の世代に語りついでいきたいと思う。

戦争のない世の中がはやく来てほしい。